

フロイトと精神分析における発達段階論の形成過程

—乳幼児の発達理論の再検討に向けて—

基礎教育学コース 濱本潤毅

Formation process of the psychosexual developmental theory in Freud and psychoanalysis

—For reexamination of developmental theories of infants—

Junki HAMAMOTO

This paper reveals initial formation process of the psychoanalytic psychosexual developmental theory in the light of sexual instinct and infancy. Through reviewing psychoanalytic text of Sigmund Freud and Karl Abraham, two results below become clear: psychoanalytic psychosexual developmental theory is inseparable from the theory of sexual instinct and object relationship, and that developmental theory was continued to be adapt to psychoanalytic treatment and theoretical progress in relation to “choice of neurosis”. From these results, this paper concludes that when we research the modern developmental theories of infants by the followers of Melanie Klein and Anna Freud in modern age, we should consider the psychoanalytic theory of sexual instinct, object relationship and practical perspective of developmental theory.

目次

問題の所在—フロイトと発達理論

- 第1項 教育学におけるフロイト
- 第2項 発達段階論の評価
- 第3項 問題への視点

第1節 フロイトにおける発達論の前提

- 第1項 欲動
- 第2項 抑圧
- 第3項 退行

第2節 発達段階論の形成過程

- 第1項 「シュレーバー症例」
- 第2項 肛門期の「発見」
- 第3項 発達段階論の完成

発達段階論のゆらぎ—結びと展望

問題の所在—フロイトと発達理論

(1) 教育学におけるフロイト

本稿は、フロイトとその後継者らによって展開された精神分析の心理学的発達段階論（以下「発達段階論」）について、その理論的な成立過程と初期の展開の動向を、主にフロイトの精神分析文献の読解に基づいて思想的に明らかにすることで、現代の乳幼児心理学における発達研究の理論的基礎の再検討を準備する

ものである。本稿が上記の目的を設定する経緯について確認するために、まずは発達理論とフロイトおよび精神分析の、国内の教育学における関係について整理しておきたい。

戦後教育学以降、国内の教育学に対してジークムント・フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の創始した精神分析は少なからぬ影響を与えてきたが、その積極的な評価や意図的な理論・実践の展開はこれまで十分になされてきたとは言い難い。2020年に開催された教育哲学会の研究討議においても、「精神分析を端緒とする深層心理学的な子ども理解は、現代の教育言説や教育実践に深く浸透している。にもかかわらずこれまでの教育学は、フロイトや精神分析は教育に部分的な影響しか与えていないとして、中心的な検討対象とはしてこなかった」（白銀・須川 2021：37）と指摘されるなど、そうした状況は現在に至るまで継続していると言える。

こうしたフロイトの過小評価という問題を、教育学における発達研究について、とりわけ乳幼児心理学の分野に限ってさらに見てみよう。現在も参照されることの多いボウルビイの愛着理論やマラーの提唱した分離—固体化過程をはじめ、スピッツやピオン、ウィニコットらによる現代の乳幼児心理学の基礎をなしている諸理論は、乳幼児の精神分析について激しい論争

を展開したアンナ・フロイトとメラニー・クラインの示した理論展開の軌道上のいずれかの地点に位置付けることができる（小此木 1985, 村田 1992）。アンナ・フロイトとクラインがともにフロイトの理論と実践を直接的に発展させようとしたことを考えれば、これらの乳幼児心理学の諸理論もまたフロイトの影響下にあることは明らかであるが、そうした点は従来の発達理論研究では十分に主題とされてこなかった（村田 1992）。つまり乳幼児心理学の分野においてもまた、精神分析の看過という問題が指摘できるのである。では教育学と発達研究におけるフロイトの影響を、私たちはどのように再評価すべきだろうか。発達段階論の研究史と現在の研究動向を通して確認しておきたい。

(2) 発達段階論の評価

まず今日における乳幼児の発達理論研究において、上述したボウルビィやマラーの理論とは対照的に、発達段階論がアクチュアルな理論として参照されることはほとんどないと言っていいだろう。フロイトの名前とともに語られる、口唇期、肛門期、男根期、潜在期、性器期の五段階から構成される発達段階論は、1960年代の発達心理学興隆のあおりを受けながら、教育実践への応用可能性への期待をこめて研究が進められた（村田 1992）。これによって発達段階論は一定の評価を得たものの、しかし性欲動の視点を根幹に含む精神分析理論を児童教育や乳幼児の発達理論に持ち込むことへの抵抗は大きく¹⁾、発達心理学の中心はピアジェやワロンの理論に委ねられるなど、精神分析と発達段階論の導入は本格的にはなされなかった。

続いて現代における状況も見てみよう。近年、発達心理学を軸とする教育理論への批判が反省的に展開されているが、発達段階論もこの批判の例に漏れるものではない。具体的には、フロイトは直接的な乳幼児の観察をおろそかにしたまま発達の過程を一方的な思弁によって理論化したという批判や、直線的に能力を発達させる近代的な個人を前提としているフロイトの発達段階論はそこに含まれない多様な「生成」を描いていないという批判が挙げられる（永野 2001, 牧野 2021）。こうした状況から、発達段階論は現在ではもっぱら発達理論の歴史に属するものとして言及されるにとどまっており、その発展的な研究は停滞していると言える。

(3) 問題への視点

教育学や発達理論への精神分析の影響を再評価する

ためには、当然ながら上述の研究状況と精神分析への批判を踏まえる必要がある。第一に、教育学に精神分析を導入する障壁となってきたその性欲動理論は、他者（精神分析における「対象Object」）に対する主体の関係一般を理解する前提であることが指摘できる。クライン以降の精神分析学派である対象関係論、およびその影響を受けている現代の乳幼児心理学の諸理論は、むしろフロイトの性欲動理論を乳幼児や母子の対象関係として具体的に展開させてきたとも言えるのであり、だからこそ現代の発達理論への精神分析の影響を再評価するためには、まずは発達段階論における性欲動理論の役割をあらためて見定めることが妥当な方法であると言える。第二に、発達批判の一部としての精神分析への批判については、その対象となっている発達段階論がそもそも何を指しているかがまず問われなければならない。先に挙げた五段階の発達段階論は、最終的にはフロイトの着想をもとに弟子の一人であるカール・アブラハム（Karl Abraham, 1877-1925）によって整備され図式化されるに至ったものである（小此木 1985）。アブラハムに手渡す以前にフロイトが試行錯誤しながら構築していた発達論は、本稿が明らかにするように、最初から現在のような明快な階層構造を呈していたわけでは必ずしもなかった。つまり、発達段階論が現在の形に固定された経緯を明らかにし、それを非段階的で錯綜したものとして捉えなおすことは、発達批判に応答する手だてのひとつとして有効であるだろう。

精神分析批判への応答から以上のように発達段階論に取り組む視点を設定した上で、本稿は、性欲動理論と乳幼児期の関係という視点から精神分析の発達段階論が形成された過程を明らかにすることを課題とする。まず第一節で、フロイトが精神分析の発達論の構築に際して手がかりとした思考を、精神分析理論の中心であった欲動論、抑圧の概念、そして退行のモデルの三つに見定め、初期の文献を手がかりとしながらそれぞれの概要を示す。第二節では、フロイト自身によってこの三つの要素が組み合わされて発達段階論の萌芽が形成されたことを確認し、フロイトが残した論点や課題を引き継いでアブラハムがそれを完成させた過程を明らかにする。最後に、上述の二つの問題点に対して発達段階論の形成過程という視点から応答を引き出し、フロイト以後の精神分析的発達研究、とりわけクライン以降の乳幼児心理学における発達理論との連続性を再評価するための課題と展望を述べる。

第一節 フロイトにおける発達論の前提

本節では、発達段階論の起源として本稿が設定する、欲動、抑圧、そして退行の三要素について、フロイトが本格的に発達段階論の形成に着手した1910年ごろまでの文献を対象に、それぞれの概要を明らかにする²⁾。これらの要素は基本的に異なる関心や目的に基づいてフロイトが精神分析とともに練り上げていった個別の思考の枠組みであるが、しかし精神分析の本格的な開始以前に、これらはある関心のもとでまとまって書き記されていた。三つの要素についての導入もかねて、フロイトがその歩みの最初期に示した構想をひとまず見ておこう。

1897年の11月14日付で親友ヴィルヘルム・フリースへ送った書簡において、フロイトは道徳の起源について考えるなかで次のようなアイデアを記している。まずフロイトは、口と肛門の二つの身体領域に着目し、動物と異なり人間の成人後にはこれらの器官はもはや性欲動の源泉にも対象にもならず、最終的には性的にふるまうその他の身体器官と一緒に性器における性活動に統合されると述べている。このとき、各々個別に快を求めて活動していた欲動は、はじめて他者というひとつの対象を目指すことになるという。またこの過程において、それぞれの性欲動は抑えこまれて移し換えられるという紆余曲折を経ることになるが、こうした欲動に対する反動的な反応の残滓が道徳であるという。こうしたプロセスが繰り返されることで人間の性は発達してゆくが³⁾、フロイトが発達の時間的順序について考えるのは、発達を遂げた後に欲動の体制がどの段階に遡るかによって「神経症選択」の問題、すなわち、人がヒステリーや強迫神経症などのうち結果的にどの神経症に罹患するかが説明できるからである。(フロイト 2001) 本稿がたどる発達段階論の形成過程とは、結局のところフロイトがこの構想を精神分析の言葉で語りなおす過程を追跡するものとなるだろう。ただここではまず、こうした一連のアイデアのうち、身体器官における性活動が欲動論のうちの「部分欲動」、欲動の抑えこみや反動形成が「抑圧」、そして欲動の発達段階を参照軸とした時間的遡行の病因論が「退行」であると、さしあたり確認しておきたい。そしてなによりも、これらの三つの要素は「神経症選択」というテーマのもとに配置されていることを強調しておくべきだろう。本節ではこの三つの要素の概要について、次節では神経症選択の問題のためにこれらの要素が組み合わせられて発達論が形成される過程につい

て、精神分析の成立以後を対象にそれぞれ明らかにする。

(1) 欲動

フロイトがはじめて欲動論を本格的に展開させたのが「性理論のための3篇」(以下、「性三篇」)である。これは主著と呼べる『夢判断』と同じく繰り返し改訂がなされた論文であるが、本項では1905年の初版に基づきつつ、ここではじめて本格的な説明が与えられることになる「欲動」にまつわる概念および「部分欲動」の概念について、以下に整理しておきたい。

フロイトは「性三篇」で「欲動 Trieb」について、「連続して流れている内身体的な刺激源泉の心的代表」であり、「質的にはまったく無色で、ただ心の生活のために要求される仕事量の尺度としてだけ考慮される」概念(フロイト 2009b : 214-215)であると定義している。すなわち欲動とは、性の生物学的あるいは器質的なプロセスと平行する、あくまで心理的なプロセスを心理学的に理解するための概念だが、この欲動のエネルギーの量的な側面に着目した場合の表象が「リビード」⁴⁾である。欲動に質的な違いをもたらすのは、その源泉となる「性源域」、具体的には個々の身体器官である⁵⁾。性源域では、やむにやまれず行われるそれぞれの活動によって欲動の解消が図られるが、この「欲動が衝迫するその先の行為」(同上 : 172)が「性目標」である。その行為はなんらかの宛先に向かってははずだが、その性目標の向かう先が「性対象」、すなわちある人物的表象や身体器官などである。

そもそもフロイトが「性三篇」で欲動概念をこのように整備するのは、「性目標倒錯⁶⁾」と彼が呼ぶ一連の性的な逸脱を分析するためである。性倒錯は、例えば接吻や窃視などのように、性目標が本来の対象を取り違えたり、また行為を途中の段階までしか達成しないこととして定義されるが、フロイトはこの性倒錯について考えを進めるなかで、「目標倒錯のいくつかは、複数の動機を重ね合わせてはじめて理解できるようになる(……)性欲動そのものも、ひょっとすると単一のものではなく、複数の成分が組み合わせられたもの」ではないかと思に至る(同上 : 207-208)。このように、それぞれの器官における性目標の総和として全体の性的な行為が成立していることに着目したときに想定される性欲動の構成要素が、「部分欲動 Partialtrieb」である。部分欲動は、つねにひとつの行為にまとめられているわけではなく、能動と受動など対になる部分欲動の葛藤が存在しているとされた。

こうした多数の部分欲動の併存という様態は、なによりもまず乳幼児の存在様態としてフロイトが想定したものである。部分欲動は、例えばおしゃぶりのように、はじめは自分自身の一部を対象として快を得る欲動として生まれると考えられている。このように部分欲動がそれぞれの対象から快を得ている状態は「自体愛」と呼ばれるが、この自体愛的なあり方こそ、子どもの欲動生活であるとフロイトは考えた。

しかし、幼児の自体愛的性生活は次第に他者を対象とするものに置き換わってゆく。これは対立する多数の部分欲動が統合されることを意味しているが、この図式の範型とされるのが、いわゆる通常の性行為である。例えば「性三篇」で挙げられる種々の性倒錯は、性行為の途上で見られる限りにおいては倒錯的ではなく、むしろ性交の最終段階を準備するものですらあり、このような形で部分欲動は性器における性目標のもとにまとめられる。性対象について見れば、この統合は自体愛がひとりの人物を対象とする対象愛へと統合されることもまた意味しているのであり、発達論的な視点からは、「性三篇」のフロイトは自体愛と対象愛の二つの発達の段階を想定していたということになる。

以上のような、欲動がその向きを変えられながら性器体制を頂点とする性目標へと統合されてゆくという欲動論の枠組みは、基本的にそれ以降も維持されてゆく。ではその統合の過程は、具体的にはどのように考えられているのだろうか。次項では欲動が変化を被るメカニズムについて見てゆこう。

(2) 抑圧

精神分析が独自の領域として成立したのは『ヒステリー研究』(1895)や『夢判断』(1900)でフロイトが独自の神経症の病因論を打ち出したからであるが、その独自性の根幹は「抑圧 Verdrängung」の概念を中心としたヒステリーの理解にあったと言える。抑圧とは、快を求める性欲動と現実の認識を担う自我のあいだに葛藤が起り、自我の防衛のために欲動に備給された表象が無意識に押しとどめられることである。抑圧によって欲動が別の表象に移動したり、あるいは身体的な症状へと転換するというメカニズムによってヒステリーの病因や夢を説明するのが、初期の精神分析のアイデンティティとも言える図式であった。

本項で確認したいのは、精神分析の根幹である抑圧の概念と、前項で論じた部分欲動との関係である。前項では、部分欲動が他の性源域での欲動へと移し替えられながら統合されることに触れたが、この過程は夢

やヒステリーにおける表象の抑圧と同じように、部分欲動の抑圧⁷⁾という理解によって置き換えることができる。しかし、すべての部分欲動が抑圧されて性器体制へと向かうわけではなく、欲動の抑圧はそれ以外の結果もまた招来しうる。本節ではそのうち、「昇華」と「反動形成」と呼ばれる結果について説明したい。

フロイトは「性格と肛門愛」(1908)のなかで、肛門の部分欲動と性格形成の関係を論じている。フリースへの書簡でも見た通り、性欲動と道徳性という一見相反するものの媒介となっているのが性欲動であるとフロイトは考えているが、ここでは次のようにあらためて説明される。人間の性欲動は数多くの部分欲動から複合的に営まれているが「それらの興奮量の一部だけが性生活のために使われ、残りの部分は性目標から逸らされて、別の目標に向け変えられる。これがすなわち「昇華」と呼ばれるプロセスである」。さらに、欲動に対して「羞恥心、嫌悪感、道徳といった反動形成物ないし対抗勢力が作り出され、それらが、ちょうどダムのように、以後の性欲動の活動を阻むようになる」というが、つまり欲動を抑圧するためにその反対物を作り出すことが「反動形成」である。(フロイト 2007b: 281) すなわち、欲動の抑圧に際して、それが自我や現実から承認される方向へと向け変えられる「昇華」と、欲動とは真逆のものを意識に形成することで抑圧を貫徹しようとする「反動形成」が起り、そのいわば副産物として人間には種々の「性格 Charakter」や道徳的観念が身に付くということになる。「性格と肛門愛」では、例えば頑固さや金銭への執着といった性格が肛門欲動から導かれているが、これを敷衍すれば人間の性格は欲動から形成されるとも言えるのであり、倒錯的な部分欲動は「わたしたちの多くの徳を生み出すその源泉として評価することができる」(フロイト 2009a: 305)とさえ言うことができる。つまり欲動とは性や身体のみに関わる概念ではなく、一般的な人間性を説明するものでもあるのだ。

次節で論じる発達段階論の形成から折り返して眺めるならば、前項と本項は(とりわけ幼児期における)欲動とその抑圧という、精神分析における発達論の舞台とその装置について見てきたことになる。次項では、発達という時間軸をそもそも精神分析に導入することになる退行の概念について確認する。

(3) 退行

フロイトが退行の考えを最初に展開したのは『夢判断』においてである。フロイトは、夢の表現内容や形

式が機能的にも時間的にもより原初的な知覚における姿へと後戻りすることを「退行Regression」と呼び、夢の基本的な性格として述べている（フロイト2011）。このように原初的なものへの回帰という意味で用いられていた退行の概念は、先ほども取り上げた「性三篇」において、より踏み込んだ意味を付与されることになる。その変容について理解する手がかりとして、まずは「固着」の概念を導入したい。

さまざまな部分欲動が性器愛へと統合される欲動の発達過程においては、すべての部分欲動が対象愛にうまく向けかえられるわけではない。「性三篇」では、その部分欲動が昇華などに向かわず幼児的な段階に留まり続けることが「固着Fixierung」と呼ばれている。固着は特定の部分欲動や時期について起こるものではなく「発達の長い道のりのどの部分でも、固着を起こす場となることができる」（フロイト2009b: 301）が、人間の性の発達が長く込み入った複雑なものである以上、すべての人にとって固着が起こることは避けられないことでもある。つまり、人間の発達に不可避に生じて残り続けるしこりが固着であるといえる。

この固着の考えを踏まえた上で、フロイトは「性三篇」で、固着した点へと性欲動が後戻りすることをあらためて「退行」と呼びなおしている。「性的発達は妨害する要因はすべて、退行、つまりそれ以前の発達期への回帰が引き起こされるという仕方では、その効力を発揮するのである」（同上、強調原文）、という表現からは、夢の素材や形式が原初的なものを用いるというかつての意味とは異なり、発達が不十分に終わった過去のある時点へと性欲動の体制が後戻りするという意味で退行という言葉が用いられていることがわかる。また退行が生じるのは人が心的な葛藤に陥ったときであり、抑圧と同じく神経症を説明するメカニズムとして退行という考えは導入されている。

こうした意味での退行の概念は、性欲動から一般的な心的機能へと拡張され、『夢判断』ではじめに提示された意味も合わせて、それらを含む全体がその後は退行と呼ばれるようになる。発達論の観点からは、次節で見てゆくように、この過去への遡行という後ろ向きの時間軸が、発達という前進する時間軸を照らし出すことになる。

さて、ここまでは、発達段階論としてまとめられてゆく各要素を個別に確認してきた。次節では、それらをフロイトが組み合わせてゆく具体的な過程を追ってゆくことにしよう。

第二節 発達段階論の形成過程

本節では、前節で示した精神分析の各概念がフロイトによって組み合わせられることで発達段階論が形成され、続いてアブラハムに引き継がれて完成された過程を見てゆく。三つの要素同士に密接なつながりがあることは前節の各項からも明らかであるが、それらが有機的に組み合わせられて発達論という形式をとるのは、フリースへの書簡ですでに示されていたように、人がどの神経症になるのかを決定している要因を明らかにするという目的においてである。本節は、フロイトがこの「神経症選択」の問題に幼児期と発達という糸口から解答を試みる過程を追跡する形で論を進める。まず第一項では、パラノイアと強迫神経症の病因論を契機にはじめて発達の時間的な層構造が提示されるまでを明らかにし、第二項ではそこに肛門期、口唇期、男根期が順に追加されて発達段階論がその原型を獲得するまでを論じたあと、第三項ではアブラハムによって発達段階論が今日の形に整備され、精神分析の公式として定着したことを確認する。

(1) シュレーバー症例

フロイトは精神分析黎明期の「ヒステリーの病因について」（1896）や「神経症の原因としての性」（1897）、またその後の「神経症病因論における性の役割についての私見」（1905）において神経症の病因論と幼児期のつながりへの関心を明らかにし始めた。ここまでは、幼児期のうちに神経症の萌芽は獲得されて成長したのちにその因子が作用し始めるというアイデアが示され、遺伝でも外傷の体験でも説明のつかない神経症の病因はそのあいだにある幼児期を考慮しなければならぬことが論じられているものの、それ以上の踏み込んだ記述は見られない（フロイト2010a, 2010b, 2009c）。

神経症選択への問題関心が積極的に表明されるのは、フロイトがヒステリーのメカニズムの解明を一通り達成し、その功績によって足場を固めた精神分析の土台から、それ以外の神経症の病因論へと手を伸ばすときである。早発性痴呆とパラノイアの二つの精神病理が考察された、シュレーバー控訴院長の手記の分析である「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」（1911、以下「シュレーバー症例」）はその試みの出発点であるが、フロイトがこのなかで神経症選択に取り組む場面から、発達段階論の形成過程を追うことにしたい。

フロイトはシュレーパーの手記の分析をもとにパラノイアの病像を一般化しようとするなかで、同性愛を共通項としてそれを「ナルシズム」と結びつける。ナルシズムとは同時期のダヴィンチ論で提起されていた欲動の体制で、(かつて母親が愛してくれた) 幼児としての自分自身を性対象として扱うことであるが、この時点ではあくまで同性愛に特殊なものとして説明されていた体制である(フロイト 2009e)。しかし「シュレーパー症例」のなかではこのナルシズムが、自体愛的な部分欲動の併存と性器による対象愛という「性三篇」で示された二つの性欲動の体制を橋渡しする中間に位置付けられる。すなわち、個別的に活動している部分欲動は、まず自己自身をひとつの性対象とすることで統合され、その上で対象が他者へと置き換えられるという、発達の三つの段階がここで新たに想定されたことになる。

ナルシズムが欲動の一般的な発達の通過点であるとされること、そしてこの上でナルシズム的な欲動の体制としてパラノイアが説明されること、このふたつの提起が結果として導くのは、パラノイアとはナルシズムへの退行であるという理解であり、つまりは神経症の病因と分岐が欲動の発達段階への退行によって説明されるということである⁸⁾。ここにおいて、ヒステリーを主題としていたそれまでの精神分析にはない一歩が踏み出されている。すなわち、ひとつの神経症がひとつの発達段階への退行として一対一で対応させられる可能性が出現したのだ。同年の「心的生起の二原理に関する定式」(1911)での表現を借りれば、「発達過程の各段階が、後の神経症発症の素因の所在となりうるというのが正しいなら、後にどの型で発症するか(神経症の選択)は、素因となる発達の制止が、自我とリビドの発達のそれぞれどの時期に起こったかに懸かっていると見て差し支えあるまい」(フロイト 2009f: 266)と考えられることになる。「シュレーパー症例」では、早発性痴呆が自体愛に、パラノイアがナルシズムに、ヒステリーが対象愛の段階に紐づけられ、それぞれの神経症の病因は対応する発達段階における固着であると述べられている。つまり神経症選択の問題に対して、「どの発達段階への固着に退行するか」という回答がまず与えられたのであり、退行を蝶番として神経症の病因論と欲動の発達論が並べられたことによって、発達論は複数のステップを持つものとして構築され始めるのである。

また「シュレーパー症例」では、退行の向かう先になる固着点は「抑圧されたもののように振る舞う」(同

上: 170) ことが付言されている。つまり、抑圧されたものの回帰=退行という等式を通して、退行によって説明される他の神経症はヒステリーと同じ抑圧のモデルに加えられるのだが、ここに人間の発達の過程で固着は不可避に生じること、すなわちそれがある意味で「正常」な過程であるということを考え合わせれば、幼児期の発達もまた——夢や錯誤行為や機知と同じように——精神分析理論によって説明可能な一般的事象のひとつに数え上げられたことになる。

このように、「シュレーパー症例」において神経症選択の問題のもとで欲動の発達段階が形成されたが、しかしこの時点ではまだ、発達の三段階は自体愛・ナルシズム・対象愛であり、また主要な神経症である強迫神経症を説明できていない。続いて、この枠組みのなかでどのように発達段階論が整備されてゆかを見てゆこう。

(2) 肛門期の「発見」

「シュレーパー症例」で姿を現した発達段階は、「強迫神経症の素因」(1913)において肛門欲動の位置が見直されることをきっかけに、より発展させられることになる。前節でも言及した「性格と肛門愛」以来、精神分析門下のアーネスト・ジョーンズらによって肛門愛についての研究が進むなかで、パラノイアをナルシズムへの退行と考えるように、強迫神経症と肛門欲動を結びつける見方が出てきた(アーブラハム 1993)。これによって、「シュレーパー症例」で提起された発達段階もまた変更されることになる。

性対象の発達が自体愛からナルシズムを経て対象愛へ至るまでの間に、部分欲動は性器愛へと最終的に統合されるのだったが、フロイトが「強迫神経症の素因」において新たに提起するのは、部分欲動が統合されて自分を性対象としているのではなく、その逆に、部分欲動が統合されないまましかし自分の外に対象を発見しているという欲動の発達段階である。この時期を支配しているのが肛門欲動であるとされた。フロイトは、強迫神経症に見られる儀式的な強迫行為を、肛門愛的性格に見られた几帳面さと肛門欲動と関係の深いサディズム的欲動の攻撃性から説明することにより、強迫神経症と肛門欲動を結びつける。これにより、強迫神経症は肛門欲動への退行であると整理された。

こうして、それまで三段階だった発達段階はより階層化されることになる。フロイトはこのテキストで「精神神経症の主要形態をふつうに並べるときの順序——ヒステリー、強迫神経症、パラノイア、早発性痴呆——

は、これらの疾患が人生のなかで突発してくる時間的順序に（まったく厳密ではないにせよ）対応している」（フロイト 2010c：192、括弧内原文）と述べ、四つの神経に対して四つの段階を発達の順序に沿って対応させている。しかしここで注目すべきなのは、それまでも性器愛がそう考えられていたように、ある発達の時期を肛門欲動などのひとつの部分欲動が支配するという形式がはじめて示されたことである。それまで発達の各段階を区切っていたのは性対象との関係であったが、これ以降は、現在の発達段階がそうであるように、部分欲動によって各段階がしるしづけられることになる。もともと自体愛やナルシズムなど性対象を問題としたときの欲動は「自我欲動」、部分欲動など身体器官から発する欲動は「性欲動」として区別されていたが、この後から、自我欲動の発達と性欲動の発達は明確に分けて考えられることになる⁹⁾。

この方向性に沿って、フロイトは1915年に「性三篇」の三度目の改訂を行う。この改訂ではじめて記されたのが「口唇期」である。フロイトは新たに「性的体制の発達段階」という一節を設け、幼児の性的発達を、性器を中心とした欲動の体制が編成されるまでの過程とあらためて位置付けて、口唇期・肛門期と性器愛の順番でその段階を記述している。ここで新たに追加された口唇期は、まだ対象と自己が未分化な状態で、口での摂取を通した「取り込み」の様式によって外界や対象と関わっている生後すぐの乳児を想定した時期で、自体愛と平行しているとされている。また、神経症選択という問題から見れば、フロイトは「性三篇」改訂と同年の「喪とメランコリー」（1915）において、メランコリーに見られる食事の拒否と口唇欲動を結びつけたアーブラハムの指摘に触れつつ、メランコリーが口唇期への退行ではないかと推論している（フロイト 2010d）。

またこの改訂で着目すべき点は、「潜在期」という期間が新たに明示されていることである。潜在期とは、幼児がまだ性交の能力を持っていないことによって一連の性的発達が制止し、思春期の二次性徴が開始するまで欲動が昇華に向かう時期とされるが、この潜在期をはさんで、分析家が実際に治療の対象とする成人と、その過去として参照される幼児期とが明確に切り離されることになる。つまり、潜在期の導入によって、乳幼児の欲動の発達段階とその先の発達とのあいだに明確な区分が設けられたのである。

さらにその後数年を経て、「幼児期の性的編成」（1923）で、フロイトは肛門期のあとにひとつの段階を

追加する。この短いテキストでは、「性器優位の下に部分欲動が正しく統合されるまでに至らないにせよ、幼児期の性的発達過程の水準でも、性器への関心と性器の活動は、成熟期に劣らず支配的な意味を獲得している」ことが認められた上で、成人と異なる子どもの性の特徴は「両性にとってただ一つの性器のみ、すなわち男性性器だけがある役割を演じている」ことにあると述べられる（フロイト 2007b：234、強調原文）¹⁰⁾。これによって、性別にかかわらず「男根期」という幼児の性的発達の最終段階が付け加えられた。神経症選択という観点からは、ヒステリーは発達の最終段階である性器体制への退行であると位置付けられてきたが、幼少期の最後に性器（男根）の部分欲動を中心とした体制が置かれたことによって、ヒステリーは男根期（のエディプスコンプレクス）への退行であると考えられるようになった。それと同時に、自体愛から性器愛へという最初期の発達段階論は、自体愛的な口唇期から肛門期を経ていったんは擬似的な性器愛である男根期へ向かい、そこから潜在期を隔てたあとようやく性器期を迎えるという形式に拡充され、この五つの段階が最終的にフロイトによる発達段階論として残されたのである。

これまでが、神経症選択の問題を契機として発達段階論が乳幼児の欲動の発達の過程として整備されたおおよその経緯である。フロイトはしかしこの発達段階論を、固定した見方として公式のように扱うことはなかった。今日私たちが知るところの図式化された発達段階論は、このフロイトの発見と平行する形でアーブラハムによって一般化されたものである。次項では、アーブラハムがどのようにして発達段階論を現在のような公式として定着させたかについて見てみよう。

(3) 発達段階論の完成

アーブラハムによって発達段階論が公式化されたと言っても、アーブラハムの意図自体はむしろ、その教条化に控えめな態度を示すフロイトのそれに近いものであった。フロイトが先鞭をつけた発達段階と神経症の対応関係を結果的には公式化することになったアーブラハムの「心的障害の精神分析に基づくリビドー発達試論」（1924）は、あくまで「試論 Versuch」であり、彼はここでフロイトが見せたような慎重さで議論を進めている。

アーブラハムはまず、メランコリーと強迫神経症の差異を出発点として、それらが退行しているとされる肛門期と口唇期の両時期について論じてゆく。アーブ

リビドーの編成段階	対象愛の発達段階
VI. 最終の性器的段階	対象愛 (両価性以後)
V. 早期の性器 (男根的) 段階	性器を除外した対象愛
IV. 後期の肛門-サディズム段階	部分的対象愛
III. 早期の肛門-サディズム段階	体内化を伴う部分愛
II. 後期の口唇 (食人的) 段階	自己愛, 対象の全面的体内化
I. 早期の口唇 (吸引) 段階	自体愛 (対象なし) (両価性以前)

図 1 (アーブラハム1993 : 89)

ラハムは、退行の枠組みを根拠としつつ神経症の観察に基づく発見をそれと対応する幼児期の欲動と結びつけるというフロイトと同じ方法を用いながら、フロイトの指摘した性欲動の発達段階について、最終的に口唇・肛門・男根期とそれに平行する自我欲動の発達をそれぞれ二段階に分け、合計六つの段階を設けて細分化した。図1はアーブラハムが示した図表であるが、アーブラハムはこれを提示するにあたり、「ここにまとめた結果は、さしあたりのもの」であり、「発達時期の数を六つに確定したいわけでは決してない」(同上:89)ことを強調し、この図表を固定したものとして受け取らないように注意を促している。しかしアーブラハムがここではじめて行った発達段階の図表化は、これと同様の枠組みの図表が現在も流布していることからわかるように、発達段階論の公式化として大きな影響力を持つことになった。精神分析家のマイケル・バリントはその影響について、「彼の表は精神分析学の思考方式に決定的な影響を与えてきた。幼児的な状況、幼年時代の事件はすべて、この段梯子のどれかに正確に位置を指定されてはじめて、その性質を決定することができることになった。」と述べ、「アーブラハムの概念が圧倒的影響を持っていた」とその当時の状況を振り返っている(バリント1999:45)。つまりアーブラハムの図表は、彼の、そしておそらくはフロイトの意図に反して、精神分析のなかで公式としての大きな強制力を持つに至ったのである。

また、このアーブラハムの論文が発達段階の公式化に寄与した要因は図表化の他にも指摘できる。フロイトがしばしば「個体発生は系統発生を繰り返す」というヘッケルの反復説を引き合いに出し、『トーテムとタブー』(1913)や『文化への不満』(1930)などで繰り返し人間の心的構造の理論と集団論・文明論の橋渡しにこれを用いたことは知られているが、アーブラ

ハムはここで、「段階的な精神的発達と早期の胎児期における器官の発達過程とが広範に並行している」(同上:92)こと、すなわち系統発生と個体発生にさらに性欲動の発達が並行するというアイデアを提示したのである。例えば、胚の発生で胎児の口にあたる部分から肛門となる部分が形成されたまた同時期に筋肉の形成も始まることは、口唇期から連続して肛門期が開始し同時期に筋肉運動が種々の欲動を引き起こす順序と重なっている、ということになる。結局のところ、アーブラハムはフロイトのアイデアを越えて発達段階に変更を加えることには慎重であった一方で、発達段階の細分化やフロイトを支持する生物学的な基礎づけには積極的であったとすることができる。いずれにせよ、発達段階の図式化と生物学を通じたその科学化という両面において、その直接的な源流はアーブラハム求めることができるのであり、その意味で彼の図表が発達段階論を完成させたと言えることができるだろう。

発達段階論のゆらぎ—結びと展望

本稿はこれまで、幼児期の性欲動を舞台とした発達段階論がフロイトによって組み立てられ、アーブラハムによって今日のように図式化されるまでの流れを概観してきた。

第一節では、発達段階論の構成要素となる欲動、抑圧、退行の各概念について整理した。欲動論ではまず欲動の周辺概念を整理し、部分欲動の複合体から性器愛への変化として発達を捉える見方を確認した。続いて、その欲動がどのような移動や変遷を辿るのかという抑圧のメカニズムについて確認し、その昇華や反動形成の結果として性格や道徳性が獲得されることに触れた。最後に退行という考え方について、それが過去の固着へとさかのぼることを意味し、欲動を念頭にお

くものであることを見てきた。

第二節では、神経症選択という問題を軸として、発達段階論が完成される過程を追跡した。フロイトはヒステリーの病因論をほぼ完成させた後、パラノイアや強迫神経症という他の神経症の解明に乗り出すなかで、その病因論と分類の手立てとして幼児期の発達の段階を想定するようになり、肛門期の「発見」を境にして、発達段階論は支配的になる部分欲動の継起として記述されるようになった。そしてフロイトが男根根を明記してその構築をほぼ終えたのと同時期に、アーブラハムが発達段階論を図表として提示したことによって精神分析の公式として定着するようになったというのが、フロイトと精神分析における発達段階論の形成過程の大筋であった。

本節では、これまで明らかにしてきた発達段階論の形成過程を踏まえつつ、本稿の冒頭で提示した問題点への回答を試みたい。

まず発達段階論のなかの性欲動理論の位置付けについて、第一節で述べたように、欲動とはまず純粋な心的エネルギーとして想定されたものであり、その抑圧や反動形成によって性格や道徳の変化さえも説明されるものであった。これは教育学における、道徳性を帯びた人格形成 (character formation) の議論にも近いと言えるだろう。つまり精神分析における性欲動は、一般的に「性」の意味するものとは大きく異なり、人格や道徳といった人間性を心理学的に理解するための大きな前提であると言える。加えて、発達段階の区分が最初から性対象との関係によって与えられており、自我欲動と性欲動が明確に区別された後も、アーブラハムの図表の各項が示しているように発達段階が対象関係と切り離せないことから、発達段階論とはなによりもまず性欲動と対象関係の発達の過程を描いたものであったことが結論できる。すなわち、精神分析の影響下にある発達理論を研究する際には、性欲動の視点は無視できないことが裏付けられたと言えるだろう。

続いて、発達批判への応答を念頭に置きつつ発達段階論が現在の段階的な形に固定された経緯を明らかにするという課題について、第二節で明らかにしたように、フロイトと精神分析が幼児期の発達の理論を必要とするのは一貫して神経症の病因論と神経症選択への回答のためであり、発達段階論は退行の考え方を通して神経症論から逆算される形で導出されていた。すなわち、発達段階論は幼児期を理解するための理論である前に、なによりもまず神経症を理解するための理論であり、精神分析における神経症の治療と研究の進展

に伴って発達段階論が作り変えられてきたことは第二節でも見た通りである。その過程でのフロイトの歩みは、慎重で留保を含んだものでありつつ、ときに憶測をいとわない大胆なものでもあったが、それは経験的素材に合わせて観念を修正し続けるというフロイトの基本姿勢の表れであり、発達段階論もまた仮説のひとつでしかないことを意味しているはずである。この発達段階論の未確定性について、ラブランシュとポンタリスの記述を引用したい。

フロイトについていうと、彼は、リビドーの発達のみならず、防衛や自我などの発達を区切り直すような段階に関する全体論的な理論の道には入らなかったと主張するのが、適当であろう。このような理論は、対象関係の概念を中心として、最後には総体的な人格の発達を、ただ一つの発生論的な系列のなかへ包括してしまうことになるからである。我々は、これは、たんにフロイト思想が未完成だということではないと考える。なぜならフロイトでは、これらのさまざまな発達系列の間にあるズレと弁証法の可能性が、神経症の決定論における本質的なものになっているからである。(ラブランシュ・ポンタリス 1977: 493)

私たちが通常考える発達段階論とはひとつの図式、一枚の図表のことであるが、むしろその形成過程から照らし出されるのは、図式に至るまでの永遠に未完結な過程こそが発達段階論と呼べるのではないかという結論である。それは実践を前提にたえざる更新を要求するものであり、むしろそこに孕まれる揺れや齟齬が生産的な認識や実践をもたらすのである。そうした側面を踏まえたとき、その固定した理論的側面のみを対象とする発達批判は精神分析の発達段階論を捉え損ねていると言わざるを得ないだろう。

最後に、本稿が目的として掲げた乳幼児心理学における発達研究の理論的な再検討を準備するという課題に対して、発達段階論と乳幼児の発達理論の連続性という視点から、とりわけクラインとアンナ・フロイトとの関連を指摘しておきたい。まずクラインについて、アーブラハムから教育分析を受けたクラインは、彼からサディズム的攻撃性をはじめとする部分欲動と乳幼児の発達段階の研究を継承して初期の主題としているが (クライン 1997)、これは明らかに彼女が終生取り組む対象関係の理論の基礎をなしている。また、「妄想分裂ポジション」と「抑うつポジション」(クラ

イン 1996) というその後期の概念は、神経症・精神病と対応する幼児期の発達段階を定めるという点で、神経症選択としての発達段階的思考の延長にあるものである。また、アンナ・フロイトが主導した自我心理学と呼ばれる一派が児童心理学に接近するなかで発達段階論が科学として事実化されたことは既に指摘されているが(下司 2006)、その発端のひとつは発生学を発達段階論に取り入れたアブラハムの「試論」にあった可能性を指摘することができる。以上の点を踏まえつつ、発達段階論がフロイトのゆらぎを内包しながら、どのような変遷をたどって種々の乳幼児心理学の発達理論へと展開したのか、その先の過程を明らかにすることは今後の研究課題としたい。

【補遺】本研究は、東京大学発達保育実践政策学センター2022年度若手研究者育成プロジェクトの助成を受けたものである。

注

- 1) 前掲の白銀・須川(2021)は、「ロマン主義的、性善説的な子ども観を有する教育学と、幼児性欲説や欲動理論を基盤とする精神分析とはいかに相性が悪い」(白銀・須川 2021: 37)と指摘している。
- 2) フロイトの概念構成は年代によって絶えず変わり続けるが、次節で発達論の成立過程を論じる都合から、本節では基本的に発達段階論の形成が始まるまでにフロイトが書いたテキストのみを対象として諸概念の概要について説明している。なお、本稿ではフロイトのテキストの引用にあたっては岩波書店版の『フロイト全集』を用い、原文を参照するにあたって『全集』が底本としているフィッシャー社版の全集(Sigmund Freud, *Gesammelte Werke Volume 1-17*, S. Fischer Verlag.)を用いた。
- 3) フロイトはこの書簡で、ある主題となる欲動が移り変わることを「発達の移行Entwicklungsschüben」という言葉で表現している。この用語は精神分析では用いられていないが、「発達段階Entwicklungsstufen」の前身となる言葉であると指摘できる。
- 4) “Libido”は従来「リビドー」と訳されてきたが、本稿ではフロイト全集での表記である「リビード」に従った。本稿では引用箇所に前者の表記があるが訂正はしていない。
- 5) 「性三篇」における欲動と性源域の定義は1915年の改訂で追加されたものであるが、改訂前と内容上の大きな違いがないため、本稿でもその概念区分を採用した。
- 6) 「性三篇」には同性愛を主とする「性対象倒錯」も挙げられているが、本稿では「性倒錯」という言葉でこの「性目標倒錯」のみを指すこととする。
- 7) 本節が対象としている時期には、フロイトは表象の抑圧と欲動の抑圧を区別していない。しかし中期のメタサイコロジー論による概念整理以降、欲動には「抑圧Verdrängung」ではなく「押さえ込むunterdrücken」などの語が充てられている。
- 8) 疾病とは機能が以前の未熟な段階に後戻りすることだという考え方自体は、フロイトの最初の著作『失語症の理解にむけて』(1891)ですでに採用されている。フロイトはここで、イギリスの失語症研究者ヒュースリング・ジャクソンの考えにしたがい、失われる言語機能によって失語症を分類してその病因を説明している(フロイト 2009a)。その結果、失語症という疾病はかえって正常な言語機能の階層から説明されることになるが、この対応関係は神経症と欲動の発達段階の関係と同じ構図にあると言える。
- 9) 本稿が引用した箇所からわかるように、前掲の「心的生起の二原理に関する定式」(1911)ですでに両者の区別自体はされていた。
- 10) フロイトはそれまでも同様の発想は何度か書き記しているが、発達段階としての男根期はこのテキストで初めて公にした。

参考・引用文献

- K.アブラハム(1993)「心的障害の精神分析に基づくリビドー発達試論」下坂幸三訳、『アブラハム論文集』岩崎学術出版社、pp.19-97.
- 小此木啓吾(1985)『現代精神分析の基礎理論』弘文堂
- M.クライン(1996)「羨望と感謝」松本善男訳、『メラニー・クライン著作集 5』, 誠信書房
- (1997)「児童の精神分析」衣笠隆幸訳、『メラニー・クライン著作集 2』誠信書房
- 下司晶(2006)『「精神分析の子ども」の誕生』, 東京大学出版会
- 白銀夏樹・須川中央(2021)「研究討議に関する総括的報告」『教育哲学研究』第123号、pp.36-42.
- 永野重史(2001)『発達とはなにか』東京大学出版会
- M.バrint(1999)「リビドーの前性器的編成の理論に対する批判的覚書」中井久夫訳、『一次愛と精神分析技法』みすず書房、pp.44-70.
- S.フロイト(2001)『フロイト フリースへの手紙: 1887-1904』マッソン.J.M・シュレータ.M編、河田晃訳、誠信書房
- (2007a)「性格と肛門愛」道旗泰三訳、『フロイト全集 9』岩波書店、pp.279-286.
- (2007b)「幼児期の性器的編成(性理論に関する追加)」本間直樹訳、『フロイト全集18』岩波書店、pp.233-238.
- (2009a)「失語症の理解にむけて」中村靖子訳、『フロイト全集 1』岩波書店、pp.1-127.
- (2009b)「性理論のための3篇」渡邊俊之訳、『フロイト全集 6』岩波書店、pp.163-310.
- (2009c)「神経性病因論における性の役割についての私見」越智和弘訳、『フロイト全集 6』岩波書店、pp.413-424.
- (2009d)「自伝的に記述されたパラノイアの一例に関する精神分析的考察」渡辺哲夫訳、『フロイト全集11』岩波書店、pp.99-187.
- (2009e)「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出」甲田純生・高田珠樹訳、『フロイト全集11』岩波書店、pp.1-98.
- (2009f)「心的生起の二原理に関する定式」高田珠樹訳、『フロイト全集11』岩波書店、pp.259-267.
- (2010a)「ヒステリーの病因論のために」芝伸太郎訳、『フロイト全集 3』岩波書店、pp.219-258.

- (2010b) 「神経症の病因における性」 新宮一成訳, 『フロイト全集 3』, 岩波書店pp.287-314.
- (2010c) 「強迫神経症の素因」 立木康介訳, 『フロイト全集13』 岩波書店, pp.191-202.
- (2010d) 「喪とメランコリー」 伊藤正博訳, 『フロイト全集14』 岩波書店, pp.273-294.
- (2011) 「夢判断」 新宮一成訳, 『フロイト全集 5』 岩波書店
- 牧野篤 (2021) 『発達する自己の虚構』 東京大学出版会
- 村田孝次 (1992) 『発達心理学史』 培風館
- J.ラブランシュ・J.B.ポントリス (1977) 『精神分析用語辞典』 村上仁監訳, みすず書房

(指導教員：山名淳教授)